



頭に除夜  
の鐘

川崎ゆきお

「今年は何もなかったなあ」

「そうなんですか」

「特に何も無い」

「はい」

「だから良い年だったのかもしれない。まだ年を越していないがね。除夜の鐘を聞く直前、大変なことが起こるかもしれないけど」

「一寸先は闇ですからねえ」

「まあ、今年は何もなかったけど、それでいいのかもしれない。ものすごく良いこともなかったし、悪いこともなかった。平穩に過ごせたということだろうか。こういう年は逆に珍しい。君のような若い人は波瀾万丈の一年の方がいいんだらうねえ。ドラマドラマで明け暮れるような」

「そうですねえ。でもあまり望んでいません」

「ほう、野望とかはないのか」

「ありますが、まあ叶えられないことが多いので、こぢんまり纏める方向になります」

「そうか、最近の若者はおとなしいと言うが」

「そうですねえ、皆が皆じゃないでしょうが」

「狭い道を」

「はあ、僕の道ですか」

「いや、生活道路のような狭い道だ」

「ああ、生活が大事だと」

「そうじゃなく、狭い道を自転車で走っていたんだ。朝だがね」

「はい、その道は何処へ」

「散歩の帰り道だよ」

「ああ、はいはい」

「園児かねえ。幼稚園だろうか。道に集まっているんだ。何人かね。それで一緒に通園するんだらうねえ。バスじゃなく」

「はい」

小さい子が何人かいる。ふざけている子もいる。元気な子だ。まだ、一人か二人、それは分からないが、待っているんだらうねえ」

「はい」

「私は危ないので、ゆっくりと走っていたんだが、ふざけていた子が急に二歩ほど動いた。自転車との距離は十分ある。私もそれなりに避けて通っているからね。しかし、ゴツンと音がした」

「接触したのですか」

「いや、そのゴツンは子供の頭から出た。母親が頭をたたいたんだよ。よく周囲を見なさいって言ったでしょって言いながらね」

「はあ」

「子供は泣き出したよ、当然だろ。何も悪いことをしていない。これは理不尽だろ」

「危ないですからねえ。だから小さいときから車に注意するようしつけているんでしょ」

「こういう子ばかりになっているんだろうかねえ」

「はあ」

「世の中はトラップだらけで、下手に動くと、ゴツンと食らうってね」

「それは違うと思いますが」

「行儀が悪いわけじゃない。元気な子だ。よく遊び、よくはしゃぐ。これでふつうだろう。それが外に出て、道で皆が見ている前で頭をゴツンだ」

「子供をしからない親もいますよ」

「どっちもどっちだな」

「親が悪いのですか」

「違うだろ。そういう世の中なんだ」

「確かに理不尽なことってありますねえ。それは昔からでしょ」

「私は悪いことをして頭をはたかれたことはない。尻ならあるがね、また道ばたでそんなことはなかったねえ」

「それは子供じゃなく、先生に対する抗議じゃないですか」

「私への」

「そうです。こんなところに自転車で入ってくるなど」

「え、どういう意味かね」

「我が子の頭をどつかないといけないことになりましたっていう」

「じゃ、私に苦情を言えばいいじゃないか」

「だって、ふつうの道でしょ。自転車や車で走るなって言えないでしょ」

「妙なことを考えるねえ、君は」

「直接言えないんですよ」

「そうなんだ」

「先生もおっしゃるように、そういう世の中なんです」

「しかし、その子は誰に復讐すればいいんだろうねえ。大きくなって」

「復讐ですか。そんな相手はいませんよ」

「親はどうかね」

「少しはあるでしょ。持って行き場としては」

「しかし、はしゃぐとしかられる。これは残るだろうねえ」

「まあ、しからない親より、いいんじゃないですか」

「よう分からんよ。今の時代は」

「長く生きておられるのに」

「そういうものさ」

